

地中海線開通以来、六年ぶりに新路線が誕生します。パリとドイツ国境に隣接するフランス東部の都市、ストラスブルとを結



↑フランス国鉄TGV
SNCF-CAV/FABBRO URTADO

日本の新幹線と並び世界に名だたる高速鉄道として、一九八一年に開通したフランス国鉄TGVは、パリとマルセイユ、リール、ボルドーなど地方都市とを結ぶ大動脈の役割を担い、市民生活に欠かせない交通手段です。近年は、国内だけではなく、周辺国のベルギーやスイス、イタリアまで乗り入れるようになり、フランスと他国の都市を結ぶ重要な交通手段にもなりつつあります。そのTGVに、今年六月、二〇〇一年の

建設区間のうち、既に完成している部分を使用した営業が二〇〇七年六月から開始され、二〇一四年には全区間の工事が終了する予定です。日本の新幹線と違い、そのまま在来線でも走ることができる特性を活かし、パリとルクセンブルク(ルクセンブルク)やフランクフルト(ドイツ)、チューリッヒ(スイス)など隣国の都市とを結ぶ路線も開設される予

定です。また、車輛も刷新され、車内のデザインが一新されるほか、車いす用座席の設置やビジネス客に対応するため無線LANの整備など予定されています。ストラスブル駅など関係する駅では、障害者対応のエレベーターの設置や、チケット販売方法の改良など利用者の利便性を向上させるための改修工事が進められています。

TGV東線概要

↑TGV東線(TGV EST EUROPEEN)です。

沿線住民との対話

一九八五年の計画決定以来、仏国鉄は沿線住民を交えた会議を実施し一九九六年に合意に達しました。あまり人が住んでいない所に建設していることもあり、日本のような騒音問題は特に大きな問題になっていないというのが実状です。

海外事務所 だより

TGV東線開通がフランス東部地域にもたらす交流拡大の可能性について

パリ事務所所長補佐 那須野 秀和(静岡県派遣)

パリ事務所

TGV東線開通により 期待される効果

TGV東線は国内TGVの中でも最速の時速三二〇km(ほかのTGVは時速三〇〇km)で運行されます。沿線主要駅における所要時間は、パリ→ストラスブール間(現在・約四時間→約二時間二〇分、工事完了後の二〇一四年には約一時間五〇分)、パリ→メッス(現在・約二時間四五分→約一時間三〇分)と、現在に比べ、四割以上の大幅な短縮効果が見込まれます。

さらに注目すべきこととして、フランスの空の玄関口であるパリ郊外、シャルル・ド・ゴール空港から、パリ市内を経由せずに直接結ばれる列車も運行される点が挙げられます。例えば、メッス市近郊に設置されるロレーヌTGV新駅からは同空港直下駅まで若干一時間一〇分で結ばれます。(現在はパリ経由で四時間近く)

これは飛行機を利用して国外からフランス東部地域を訪れる人にとっても、また同地域から国外に移動する人にとっても非常に大きなメリットです。

飛行機利用者のTGV利用へのシフトの可能性について、「鉄道を選ぶか、それとも飛行機にするかの境界線は、日帰り旅行が可能な片道三時間」と言われていることもあり、仏国鉄では、TGV東線開通により飛行機利用者の約半数が鉄道利用に移る

と見込んでいます。

沿線地域における地域振興・ 産業振興の取組み

沿線周辺都市におけるTGV東線に対する期待は非常に高く、ストラスブール駅など主要駅では二〇〇六年十二月時点で早くも開通日までのカウントダウンを示す掲示板が掲げられていました。

また、TGV東線開通を一つの契機ととらえ、人、モノを呼び込むための整備を進めている地域も見られます。

ここでは、その具体的な事例としメッス市の取組みについて紹介します。

メッス市はベルギー、ルクセンブルグ、ドイツと国境を接するロレーヌ州の州都、モゼル県の県都で人口は約一二万人。従来から工業が盛んな都市です。

メッス市では、TGV東線建設着工の一年前の一九九六年に、TGV東線開業による交流拡大を見据えて、メッス駅近く旧貨物駅跡地五〇haの再整備計画を決定し、



↑開業までの残日数を示す掲示板

「Quartier del Amphithéâtre」の名称で整備を進めてきました。

同地区には、パリにある現代芸術の複合施設「ボンピドゥセンター」の分館や大規模催事場などの公共施設の設置に加え、オフィススペース(五万㎡)、商業スペース(三万八〇〇〇㎡)、住宅スペース(一五〇〇〇戸)が設置されることになっています。

特に、ボンピドゥセンター分館(二万㎡)については、リールやボルドーなどほかの大都市との誘致競争を制して建設が決定されたもので、メッス市に対する工業中心のイメージを変えてくれるものと、地元から非常に高い期待が寄せられています。現在、日本人建築家、坂茂氏による設計のもと、二〇〇九年の完成を目指して建設が進められています。

メッス市はこのほか、周辺都市と協力し地域としての発展を目指した取組みも行っています。

メッス市と周辺の三七のコミュニティ(日本の市町村にあたる)から構成されるメッス都市圏共同体では、フランス国鉄やロレーヌ州、モゼル県、観光関係者、大学関係者なども加わり、二〇〇五年からTGV東線の有効



↑ボンピドゥセンター分館完成図

活用を目指したプロジェクト「METZ METROPOL320」を立ち上げました。

同プロジェクトでは、「経済開発」、「都市整備、交通」、「観光、文化・レジャー」、「高等教育・研究機関」の四つの柱で、さまざまな取組みを進めています。

例えば、「経済開発」の場合。現在メッスには、二〇〇の企業や学校、研究所などが進出し、四〇〇〇人の労働者と四五〇〇人の学生がいる企業団地「テクノ・ポール」があります。現在、「テクノ・ポール」の建設が進められ、企業の誘致に積極的に取り組んでいます。さらに、メッス近郊都市にある同様の二つの企業団地、そして国境を越えたルクセンブルクの企業団地と共同で情報通信技術や物流、研究など共有、効率化を目指した取組みが行われています。

また、「観光・文化・レジャー」では、文化行事や会議、スポーツ行事の開催とそれに付随した観光の取組みに力を入れています。コンベンションホールやスポーツ施設の整備・紹介を行うほか、美術館やオペラ劇場などの近代施設や自然を活かしたグリーンツーリズム、そしてホテルの紹介などを行っています。今後さらに、ポンピドゥーセンター分館の開設が非常に大きな効果を与えることは言うまでもありません。

「都市整備、交通」では、メッス駅と近隣の空港、高速道路とのアクセス向上により、ヨーロッパの他の都市との交流拡大に向けた取組みが行われているほか、「高等教育・研

究機関」においても、特にドイツやベルギー、ルクセンブルク、スイスを中心により広い範囲から学生や研究者たちを呼び込むためのさまざまな取組みが行われています。

これら地域としての取組みは、個々のコミュニティの規模を大きく超えたスケールでの一体的なPRを可能にし、時には国境をも越えた取組みさえ可能にしているほか、一方で地域同士の結びつきをより強める効果も期待されます。

フランス東部地域で今後ますます予想される交流拡大について

現在フランスでは、日本の新幹線通勤のように「TGV通勤」をするビジネスマンたちが増えています。今のところ、「通勤エリア」はパリから一〇〇km圏内、片道の所要時間が四〇〜五〇分程度とされており、メッス市のように一時間三〇分という所要時間はちよつと長いとしても、一時間一〇分程度結ばれるロレーヌTGV駅なら通勤可能かもしれません。

このように、TGV東線開通の最大の魅力は、従来の固定観念を打ち破り、かつては誰もが考えなかつたようなことを実現させる可能性を秘めていることにあります。

一方で、TGV東線によりフランス国内諸都市、ヨーロッパ内諸都市との距離が縮まるといことは同時に、都市間競争が激しくなることをも意味しています。

二〇〇七年一月時点ですでに、メッス市中心部の地価は上昇し、パリ郊外のそれに近付いている状況です。また開通後に、地元経済を担う優良資本が外に流出するのではとの懸念も高まっています。人の流出についても同様です。

そうした際に重要なのは、ただTGVが開通したことを能動的に受け止めるだけでなく、それをまちそして地域の発展のためにどう活用していくか、どういう可能性があるのか追求していく姿勢でしょう。

TGV東線は、パリとスロバキア共和国の首都、ブラチスラバまで結ぶ壮大な構想の一部と位置付けられています。全線が開通した場合、沿線の住民三四〇〇万人および一〇の空港を網羅することになっています。つまり、今後、競争相手となる都市はますます増えていくということです。

TGV建設資金を負担したフランス東部地域の各自治体が、個々にそして連携して、今後、どのように発展を遂げていくのか、フランス国内他都市との関係、ヨーロッパ周辺都市との関係においてどう魅力を向上させていくのか大いに注目されるどころです。

＜参考資料＞

朝日新聞(二〇〇七年一月一〇日付朝刊)
 フィガロ(二〇〇七年一月二五日付)
 2006 CLAIR 国際塾聞き取り調査記録(二〇〇六年一月二〇日実施)

＜写真提供＞

フランス国鉄、メッス市

海外生活 だより

パリ事務所

ブルゴーニュ州政府での研修 各種会議に参加して

元パリ事務所所長補佐 村松 茂樹（山梨県派遣）

はじめに

パリ事務所では平成一八年度からフランスの地方自治体の行政運営の実態を一週間ほど現場で経験する「スタージユ（研修生制度）」が創設されました。「州政府」の運営実態に以前から興味があった私は、ブルゴーニュ州政府を研修先として選択しました。今回はこの研修期間で出席した各種会議について、印象に残った点を書いてみたいと思います。

州議会

研修初日、二〇〇七年予算を審議する議会に出席しました。

州知事は行政の長であり、議会の長で

もあるため、議会の議事進行役は当然知事が務めます。議員からの質問や意見に対し、自分の言葉で、時にはきつく、時には柔らかに答える姿は強いリーダーとの印象を受けるとともに、トップが熱く語る姿は質問者に対し説得力を増し、信頼を与えるようでした。

州議会は現在五七人の議員で構成され、共産党・六、国民戦線（FN）・五、緑の党・六、社会党（PS）・二五、UMP・一四、無所属・一という党派構成になっています。議会の議席配置は右派、左派の言葉どおり議長から向かって右から国民戦線（FN）、UMP、社会党（PS）、共産党、緑の党といった順に配置されていました。最大党派の社会党（PS）も過半数は確保していないので、共産党と政策連携を取りながら議会運営をしているのが実態です。

反対意見の議員に、激しくやじを飛ばしている光景もあり、活気ある真剣そのものの雰囲気でした。

与党議員が執行部の各部署の責

任者を兼ねる仏の地方自治制度（知事も議員です）では、予算審議は日本のような知事（執行部）vs. 議員（議会）といった図式ではなく、議員vs. 議員、つまり政党間の対立の場となります。知事（議長）以外の各部署の責任者である議員は議場では、執行部席におらず、自分の議席にいます。

事務総長は知事の隣に着席し、知事の協議にいつでも対応しますが、議員に向かつて直接発言はしません。次長や課長が事務総長の後ろの執行部席に控え、いつでも知事と協議ができるよう待機していました。

会議中、課長には議員からメッセージャーボーイ（議場に常時五人程）を通じて、資料要求のメモが渡され、これに対しその場で各課長が対応しているのには驚きました。事務総長に後に伺ったところ、情報開示は課長の判断で行われているとのことでした。



↑ブルゴーニュ州議会

管理職会議

研修二日目、月に一度開催される管理職会議に出席しました。事務総長、事務次長（四人）、課長（約一六人）が出席し、各参加者から所管事項の進捗状況の報告や事務総長からの指示がなされていきました。フランスの地方公務員はその職階に応じて三つに資格がクラス分けされており、自分の資格に応じた職階であれば、全仏どの自治体でも求人に応じて就職できます。このため、ブルゴーニュ州政府の職員といってもブルゴーニュ州出身者は少なく、全国から優秀な人材が集まっています。

私は、今回管理職の方と行動を共にしたのですが、彼らは日本の大部屋同居形式と違い個室で執務し、秘書がサポートしています。このため、各人は専門性が非常に高く、お互いの連絡調整は会議でなされることとなります。また、自らのポストである事務総長と顔を合わせる機会が頻繁にあるわけではないので、実力のPRはもちろん、上司への印象にも配慮しているようでした。このため、事務総長、ほかの管理職が参加する管理職会議は至って重要な会議ということになります。

ちなみに私が同道した課長さんは朝八時から夜九時まで、時間外も関係なく働いていました（事務総長は土曜日でも働くことがあるとおっしゃっていました）。週三五時間

の労働制約は管理職には関係ないため、彼らは絶えずキャリアを積み、上の資格を目指す努力を怠っていないという印象を受けました。この課長の場合、毎日三〜五の会議があり、それぞれが一時間から一時間半程度（終了は読めない）かかります。議論中心で自らも積極的に議論に参加し、職階が上の者ほどリーダーシップを発揮し、よく話します。資料精査や決裁書類は会議の合間になされ、決裁文書の疑問点は秘書を通じて担当者へ問い合わせ、担当者より説明書類の再提出および説明がなされます（課長は個室で待ちます）。

国との協議の場

州は、地域経済発展、職業教育・文化遺産管理、地域内交通を主な業務としていますが、業務推進にあたり、地域経済発展計画に関しては国と業務契約を結ぶ必要があります（国と州は実施主体として独立していますので、「契約」による業務提携となっています）。今回、州政府が国と協議する場に出席する機会を得ました。

二〇〇七年から二〇一三年の地域間交通、地域経済発展計画、職業教育、自然環境保護、文化遺産、林業・農業発展、中心都市の機能強化といった内容および予算の負担割合につき国と協議する内容でした。

議長は州の事務総長。出席者は国のブルゴーニュ州担当官、州からは事務総長、関

係次長、担当課長、担当者の事務総長が元プレフェ（地方長官・国家公務員）ということもあってか、全体的にプレゾンで呼び合う友好的な雰囲気。しかし、議論は細かく、進展に時間がかかるという印象を持ちました。

むすびに

つつみ隠さずすべてをオープンにし、問題に対して情報を共有し、皆が意見を出し（本当に参加者全員が意見を持っている！）、議論する。果てしなと思われ議論もお互い顔を見合わせながら、論理的合理性で結論を見出す。そのため、優秀で強力なリーダーシップを取れる者がトップ（知事、事務総長）にいる。

いくつかの会議に参加し、個人主義に立脚した民主主義の意思決定プロセスとはどういうものかを今回の研修で実感できたような気がしました。



↑ブルゴーニュ州庁舎（本館）